

A 語句の意味と読み

(1) 読み＝ぎょくてき／意味＝玉で飾った美しい笛。りっぱな笛。／実際に玉で作った笛というより、笛やその音色をほめていう言い方（美称）

(2) どこからともなく。（吹き手の）姿は見えないまま。※「ひそかに・こっそりと」と訳す教科書もあるので、お使いの教科書の説明に合わせる。／★ここを「暗く」「暗い中で」とだけ訳すと不十分。音は聞こえるのに相手の姿が見えない、という意味合いが大事

(3) （笛の音を）遠くまで響かせる。音を遠くまで届かせる、ということ。／★物を空中に飛ばすのではない。目的語が「声（＝音）」なので、「響かせる・届かせる」と訳す

(4) 散り広がる。（一つの家から流れ出た笛の音が、あたりに散り広がっていくということ。）／★花が散るのではない。散っていくのは前の句から続く笛の音

(5) 読み＝らくじょう／洛陽の町。長安と並ぶ唐の大きな都市で、この詩で作者が旅の身を置いている町。／★「城」は城壁で囲まれた町のこと。日本語の「お城（建物）」ではない

(6) 読み＝せつりゅう／楽府の曲名「折楊柳（せつようりゅう）」のこと。別れを歌った曲。／★柳の枝を折る動作そのものではなく「曲の名前」。ここを外すと第三句がまるごと崩れる

(7) ふるさと。故郷。／「園」は屋敷やその庭のこと。「故園」で、もとい家＝ふるさとを表す

B 句法

(8) 疑問を表す働き。疑問の語「誰」を受けて文末を「ぞ」で結び、「いったいどこの家の笛（の音）であろうか」と問いかけている。／★同じ詩の中に、第一句の疑問と第四句の反語が両方ある。どちらかを取りちがえやすいので、文末が「ぞ」か「ん」かで見分ける

(9) 漢文は「動詞＋目的語」の順に並ぶが、日本語は「目的語＋動詞」の順に読むため。下の「折柳」を先に読んでから「聞く」に返って読む。レ点は下の一字からすぐ上の一字に返るときに使うが、ここは「柳」から「聞」へ、間に「折」の字をはさんで返るので、レ点では読めず一・二点を用いる（「柳」に一点、「聞」に二点）。／「聞く」の下に、何を聞いたのか置かれている形。★レ点はすぐ上の一字に返るとき、一・二点は間に字をはさんで（二字以上へだてて）返るときに使う

(10) 反語。「何人か～ざらん」＝「どの人が～しないだろうか、いや、誰もが～する」。／★文末を「～ん（む）」で結ぶのが

反語の目印。疑問なら答えを求めて終わるが、反語は「いや、～だ」と言い切って強調する

(11) 疑問・反語を表す係助詞。文末の⑫「起こさざらん」の「ん」と呼応し、「何～ん」の形で反語を表している。／★白文「何人不起故園情」には「か」も「ん」にあたる字もない。反語であることを示すために、訓読するときに補って読んでいる

(12) 打消の助動詞「ず」の未然形。下に推量の助動詞「ん（む）」が続くので未然形「ざら」になる。白文の「不」にあたる。／「不起」＝「起こさず」。それに「ん」が付いて「起こさざらん」となる

(13) 何人（なんびと）か故園（こゑん）の情（じやう）を起（お）こさざらん。／白文は「何人不起故園情」。「起」の下に目的語の「故園情」が置かれているので、日本語では「故園の情」を先に読んでから「起こさざらん」へ返って読む

C 主語・指す内容

(14) 笛の音。第一句の②「玉笛」の音色。／★漢文の「声」は「音」の意味。人の声とまちがえない

(15) 笛の音。第一句の②「玉笛」の音が、そのまま第二句の主語として続いている。／★第二句には主語にあたる語がない。前の句から続く笛の音を補って読む

(16) ②「玉笛」＝どこかの家から聞こえてくる笛が奏でている曲の中、ということ。作者はその調べのなかに⑨「折柳」を聞きとっている。／「誰が家の玉笛ぞ」→「曲中 折柳を聞く」とつながる。曲名を答える問ではない

(17) 作者（李白）。旅先の洛陽の町で、姿の見えない笛の音に耳をすませている作者自身。／詩の中に「われ」とは書かれていないが、耳をすませているのは作者

D 口語訳

(18) いったいどこの家の笛の音であろうか。（吹き手の姿は見えないまま）どこからともなく、その音を響かせている。／「声」＝音、「暗に」＝どこからともなく。この二語の訳で差がつく

(19) （笛の音は）散り広がって春の風の中に入りこみ、洛陽の町いっぱい満ちわたる。／主語は前の句から続く笛の音。訳すときに補う

(20) この夜、その曲の中に、別れの曲『折楊柳』を聞いた。／「折柳」は曲名なので、無理に「柳を折る」と訳さない

(21) 誰が故郷を思う気持ちを起こさずにいられようか。いや、誰もがふるさとをなつかしきはずにはいられない。／★反語なので「いや、～」まで書く。ここを疑問のまま訳すと減点される

E 内容・記述

(22) 吹き手の姿は見え、どこの誰が吹いているのかも分からないということ。夜の闇の中を、音だけが流れてきている。／だからこそ第一句は「誰が家の…ぞ」という問いかけで始まる

(23) 一軒の家から出た笛の音が、春風に乗って散り広がり、洛陽の町全体に満ちわたる。(三十八字)／小さな一つの音が町全体へ、と大きく広がっていく描き方。「春風」が音を運ぶ役をしている

(24) 故郷を離れ、旅先である洛陽の町に身を寄せていた。題名「春夜洛城聞笛」から、春の夜に洛陽で笛を聞いたことがわかる。／旅人だからこそ、別れの曲がそのまま望郷の思いに変わる

(25) 「折柳（折楊柳）」は、旅立つ人を見送るときに柳の枝を折って贈った風習にちなむ、別れを歌った曲だから。その別れの曲を聞いたことで、故郷や親しい人と別れて旅にある我が身が思い起こされ、望郷の思いがわきおこる。／★「音を聞いた→ふるさとを思った」だけでは足りない。「折柳＝別れの曲」という中身を必ず入れる

F 文学史・故事（本文全体をふまえて答える）

(26) 七言絶句／声・城・情。一句が七字で全四句だから七言絶句。七言絶句は第一・二・四句の末で韻をふむのが原則で、この詩も第一句末「声」、第二句末「城」、第四句末「情」がそれぞれにあたる（第三句末の「柳」はふんでいない）。／★五言か七言かは一句の字数、絶句か律詩かは句の数（四句か八句か）で決まる

(27) 唐（盛唐）の詩人／杜甫と並び称される。／李白は「詩仙」、杜甫は「詩聖」と呼ばれる。字（あざな）は太白

(28) 別れにあたって柳の枝を折り、旅立つ人に贈るという風習。（「柳」の音が「留（とどまる）」に通じるからだと言明されることが多い。）／この風習から生まれた曲が「折楊柳」。だから「折柳」は別れ・惜別を思わせる語になる

【現代語訳（全文）】

いったいどこの家の笛の音であろうか。（吹き手の姿は見えないまま）どこからともなく、その音を響かせている。

笛の音は散り広がって春の風の中に入りこみ、洛陽の町いっぱいに満ちわたる。

この夜、その曲の中に、別れの曲『折楊柳』を聞いた。

誰が故郷を思う気持ちを起こさずにいられようか。いや、誰もがふるさとをなつかしまずにはいられない。